

# 被災資料の修復と事前対策

◆  
坂本 勇

## 阪神・淡路大震災を振り返って

1月17日未明に阪神間を襲った大震災は、6000人にのぼる人命と甚大な物的被害を及ぼし、従来までの図書館等の防災対策や設備、緊急救助方法を根底から問いなおす結果となった。これまでの予想をはるかに超えた地震規模であったことが、今回のように被害を大きくしたと思われるが、後述するように「人命と資料を守るライン」をどの程度にするかによって、今後の災害に対する予防力は大きく変わってくることになる。

また、自治体などの作成した防災マニュアルが実際の災害時には役に立たなかった、あるいは、主体となる職員自身が出動できなかった、電話など通信機能がマヒをして状況確認や連絡ができなかった、などの反省が出されているが今後の他地域での防災対策に被紋を及ぼすことと思われる。

これらの個々の検証については別の機会にしたと思うが、今回の関東大震災以来の都市型大震災である阪神大震災において特記すべきことは、人命優先の厳しい雰囲気の中で軽視されがちな「文化遺産」「近現代歴史史料」などの廃棄防止、倒壊家屋からの救助サルベージ活動、総合的被害状況調査などの活動が地震2週目から地元の学生、主婦などを含む大勢のボランティアにより始められ、画期的な成果をあげたことであろう。ここで重要なポイントとなったことは大勢のボランティアをコーディネートでき、専門的な助言のできる判断力のある専門家の需要であった。被災直

後の混乱した場面において、専門的な立場からの「最初のきっかけ」がないと「未知の領域における立ち上げ」は難しく、またその後の継続性や全体像も大きく変わってしまう。

## 資料を守る三つの環境要因

災害発生時に、被災地域の図書館資料を含む収蔵品の命運を左右する三つの環境要因を考えてみたい。第一は、保全修復の技術的な環境要因。第二は、保全修復物資など支援環境要因。第三は、日頃からの保全修復情報を含む防災環境要因。

今回も阪神間の図書館などでスプリンクラーの誤作動などにより、図書資料などが大量に水災害に遇った。上記の環境要因でみると、水災害に遇った資料を具体的に保全修復できる保全乾燥技術が必要となる。あるいは、保全修復技術があってもその技術を実施できる物資や装置が現場になれば、技術だけでは助けることはできない。また、いくら保全修復技術や物資・装置があっても、被災した施設の関係者が日頃からの知識として被災した収蔵品の保全修復救助技術や要請先などの保全修復情報を知らなければ被災した図書資料を助ける行為は成り立たない。これら三つの環境要因をいかに整備するかが要となる。

## 資料の歴史情報とは何か

かつて『地方史研究』43巻5号に書いたが、被災資料を考える上で配慮しなければならない「資料の歴史情報」について触れておきたい。昨今の

実証的な研究成果にみられるように、これまで偏重してきた資料の表面的な文字・絵画情報にとどまらず、素材そのものや盛り込まれた製作技術情報などが重要になってきている。最近のことは、古典籍のコヨリから炭素分析によって年代域を推定することが試みられたりしている。今後、インクや紙の分析が進めば、修復に際して「いかにオリジナル情報を残すか」ということがますます重要になってくることと思われる。

### 事前対策

災害に備えて事前の対策の有無が被害の程度を左右する。ここでいう事前の対策とは、上記の項で述べたように実際の災害時に役に立たない実用性のないものは排除したい。かつて、『水災害を受けた図書館／文書館資料の救助法』（仮訳版、1990年刊）の“あとがき”に書いたように、アメリカの図書館の壁面に貼ってあった簡素で「実用的な」災害対策小ポスターのようなものが求められる。今回の震災でも歴然としたように、被災した個々の館で事前に用意する具体的なさまざまな災害に対応した「災害対策マニュアル」「緊急連絡網」「任務分担」「災害対策用品キット」は、個々の館では対応できない技術的な問題を支援してくれる専門家のネットワークや物品機材供給会社などのサポートに裏付けられていて初めて実効性をもつ。

アメリカの例のように、きめの細かい対策を盛り込んでいくことが推進されることを願う。一時期、コスト計算や総合的な災害対策ビジョンの欠如したまま一つの限定された技術でしかない「真空凍結乾燥技術」が、水濡れ文書に有用と大きくクローズアップされて語られたことがあった。これなどは、技術に短絡してしまい包括的な災害対策がなおざりにされていることを象徴的に示していたように思われる。

### 守る限度は？

十全な災害対策を講じるのが望ましいが、現実

は必ずしもそのようにはなっていない。今回の阪神大震災においても、数年来兵庫県において活断層の地震研究が継続的に行われ、地震の危険性を報告していたが、実際には無防備に等しい惨状となった。災害対策はいつ起こるかわからない「予測できない」ことであるため、防災に対する力の入れようは個々に千差万別となる。スウェーデンやノルウェーなどの図書館などが核戦争まで想定し、地下の岩盤下にコストはかかるが強固な収蔵庫を建設している例に示されるように、徹底して収蔵資料を守る姿勢を打ち出しているケースもある。国内でも静岡県のように、数億円かけて県内の学校を順次耐震構造に替えていく工事を進めている自治体もある。

一体、どこまで本気でさまざまな災害から収蔵資料を守る意思があるのかという問いかけが、常になされているのである。

### 今日と明日のために

阪神大震災の救援・復興活動はまだまだ続くことを思い、神戸など被災地域における図書館資料の保全修復作業について報告しておく。残念ながら、阪神大震災においては目を見張るような被災資料の修復保存処置はなされていない。水に濡れ廃棄された大量の点字図書・一般図書、濡れたまま箱詰めされカビのはえた図書、救助の要請もなくブルドーザーで踏み崩されていった古文書や歴史遺産。愕然とするような状況であった。

そのような悲しみから跳躍するように、おびただしい震災報告書、文集、個人史、作品が現在生み出されてきている。震災直後のチラシや新聞には傷みのひどいものも多い。アメリカのNEDCCなどの支援でアメリカ製のエンキャプスレータを神戸に設置し、現地の実情に合った保存処置を講じることが計画されている。神戸の図書館、頑張ってもらいたい。

(さかもと いさむ：TRCC 東京修復保存センター代表)  
[NDC：014.6 BSH：1.資料保存 2.阪神・淡路大震災]